

幼児集団の発展過程に関する一研究

野口はつ江

幼稚園における幼児の活動のうち、いろいろな遊具を用いた自由な活動の占める割合は非常に大きく、また最も指導のむずかしい箇所でもあると思われる。新しい遊具を備えてそれによってある種の活動を展開することを期待しても必ずしも予測通りの活動が現われなかつたり、ともすれば好ましくない活動が生れるきつかけとなつてしまつたりすることに出会うこともある。少ししか遊具がないために奪い合いや対立、独占などの関係が現われるのはその一例である。したがつて、遊具が誘発する活動にはその遊具固有の機能や特性による活動以外に遊具が媒介になつてもたらず他の効果も大きいことが予想され、その効果を考慮しながら指導をすることによつてより好ましい状況を作り出すことができるようになるのではないかと考えられる。ここでははじめは個人的に示した遊具への興味や活動がいつのまにか集団的な活動をもたらず場合が非常に多いことか

ら、遊具の役割の一つであるそれが、媒介となつて幼児同志の結びつきを作るといふ問題を取りあげて、幼児と遊具の関係と幼児同志の関係との対応について考察してみた。すなわち、子ども同志の関係がどのようにして作られ、どのような形をとっているかといふことを遊具がどのように使われ、遊具に対してどのような反応がされているかといふことに関係づけて明らかにして、幼児の自発活動に対する意図的な指導方法の手がかりを得ようとするものである。

〈目 的〉

1 幼児の遊具に対する反応及び遊具に即した活動と幼児同志の関係の対応を明らかにする。

2 幼児の遊具に対する反応、活動及び幼児集団の変化発展の過程を明らかにし、その類型化をはかる。

3 1・2の結果から指導の機会とその方法を考察する。

〈方 法〉

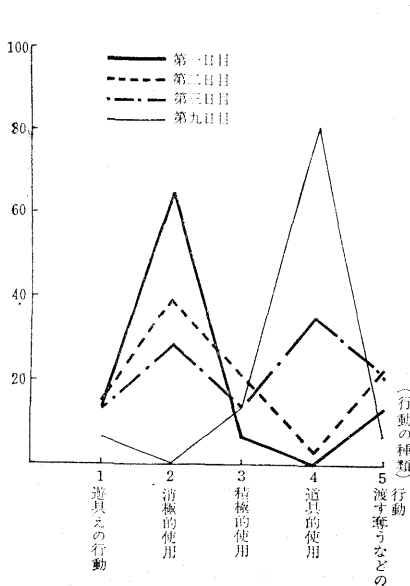
手続 遊具の種類によって遊具の役割、幼児の活動、集団過程が異なることが予想されるが、ここでは一例として比較的扱いやすい動物の縫いぐるみをとりに上げてそれに伴う活動を分析した。

手製の縫いぐるみのぞう（長さ55cm、高さ30cm、上に乗って坐れるもの）を保育室中央の机の上に置き、自由遊びの時間にこの縫いぐるみを中心に展開される行動を観察記録する。

表1 縫いぐるみに伴う活動

活動の種類	例	遊具への心
1 縫いぐるみそのものへの強い関心に基づく行動	たたく たわる など	大
2 人が主体になっていくが所有者と結びつき、使用の仕方が消極的な行動	だる くお るな ど	
3 積極的使用の行動（他の遊具といっしょに使用するなど）	積木にの 走せ せ	
4 道具的使用の行動（ごっこ遊びなどで位置づけをするなど）	乗ったま まを たか かな ど	小
5 主としてこの行動に付随して起る人間関係優位の行動	渡す 奪う など	

図1 日による行動の差



〈結 果〉

対象幼児 五才児ークラス（40名、二年保育児、一年保育児混合組）

期間 昭和38年7月8日から7月18日まで

時間 8時40分から約1時間

分析内容

1 幼児が縫いぐるみの方に對して、またはどうに誘発されていった行動の内容の把握とその類型化

2 縫いぐるみの方に伴う活動に即して現われた発言内容

3 幼児同志の結びつき方、結びつきの度合い、その他の特徴

① 観察結果について

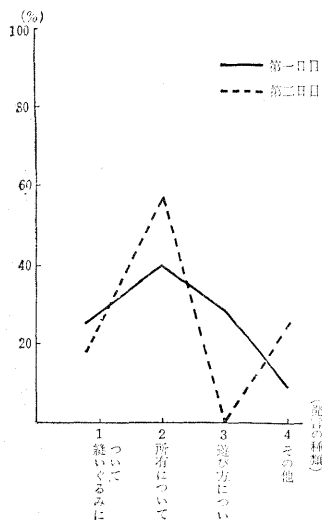
まず観察から得られた縫いぐるみに対する幼児の活動の型をみると、表1に表わしたような型にわけられる。これを更に日によって現われ方がどうちがうかについてグラフに表わしたものが図1である。

これらの結果からはじめは遊具自体への関心が強く、そのためにかえって積極的な働きかけは少なく所持しようとする活動が多くみられ、やや慣れた二日目になると種々の活動が現われ、対立も多くなりられるようになる。更に第三日は道具的な使用が非常に増加するのが特徴的であるが、奪い合いの行動がかなりみられるところから遊具への関心もかなり強い時期とみられる。九日目になると縫いぐるみ単独の使用はほとんどなくなり、必ず何か他のことをしながら

表2 発言の型

種類	例
1 縫いぐるみそのものについて	中に何入って いるのかな
2 所属, 所有について	かしてちょう だい
3 仕方の仕方, 遊び方について	ジャンケンし ようなど
4 その他, 役割など	びて箱もって家 に来る、小さいのあ

図2 発言内容の月による差



らそれを扱うようになり関心の薄さが顕著であった。この結果を次の会話の内容の分析との対応してみると一層その特徴が明らかになるう。

発言内容の種類を大きく分けると表2のようであった。更にこれに関してその頻度が日によってどのように異なるかを表わしたものが図2である。

発言数は第一日目25、第二日目12である。第三日以後はその内容がほとんど4のその他の部に属するものであり、その数も徐々に減少し、終りの頃はほとんど発言がなされなくなった。

この結果から、

第一日目は遊具への働きかけ以前の幼児内部の緊張や幼児間の関係の緊張がかなり大きいために発言が多くなっているが、その後遊具への働きかけが積極

具への働きかけが積極的になるにつれて必要な発言のみがみられることが考察される。そして遊具への関心が薄れるに従って、遊具が会話のきっかけとなることは少なくなり、他の関係から生れる会話

の中でその遊具が使われる状態になる傾向がみられた。

第三に幼児同志の関係や結びつき方の特徴についてみると、第一日目は対立的、散発的な仕方、縫いぐるみを中心幼児が集中しているような形をとる。次々に参加はなされるが、よくまとまった形はとらない傾向が強い。第二日目は二人または三人の間でやりとりされたり、二、三人で一緒に使用され、そのメンバーが一人ずつ変化したりするが、関係がとだえないような流れがみられる。遊びの中では次々と異った遊具（積木、人形、とび箱など）がとり入れられたり、投げ合いなどの変った使用がみられたりした。第三日目になるとやや関係がとだえるという特徴が現われ、使用した後、一度どこかに置いておき、次に誰かがとり上げることが何度かみられた。しかしその時々々の使用の際にはごっこ遊びの中に位置づけられたり、乗ったままで歌を歌ったり、二人で乗ったりなど、多面的なまた機能的な使用がみられ、参加する幼児同志の関係も安定して長続した。その後は縫いぐるみへの関心が減少するのにもなつて関係を成立させるきっかけとはならず、他の遊びの道具となることがほとんどになった。

② 集団過程の類型について

以上のような諸点から、ものを媒介とした集団形成に関してには次のような段階が想定される。

1 幼児ははじめ対象物への関心が強く、断片的なぶつかり合い

が行なわれ、発言も自己表出的なものが多く個人的な関係にある状態。(ものの所在に規定された活動)

(中に何入っているのかな、何だかわかんね、耳には入っていないよ、あついいものがある、かりんなあれは○○ちゃんばかりいじっているんだ、○○ちゃんのかい？ かけて、○○ちゃんがかけてだめって言ったんだもの、順番につかないさきいって、などの会話をしながらだいたりいじったり、とり合ったりする。)

2 所有物としての関心が強く、対立関係から交替関係へと移り、二、三人の中で継時的なつながりが作られる。(ものの所在に規定された関係が作られる)

(Aがとび箱にぞうを乗せる。Bが来て、かけて、Cも加わって話し合っていたがCがぞうをもってとび箱の上に乗せる、Bがぞうをとってぞうの上に乗る、Dがぞうをたたいて通り去る、Bは今度はぞうを背おうが落ちる、Eが来てBのだいたぞうをたたいて通るが再びもどってぞうの鼻をつまんでBから奪う、BがまたEから受けとってぞうに乗る、Fが来てのぞきこむ、しばらくしてHのもっているボールとぞうを交換する。などの活動が行なわれる。)

3 ものを単独に使用することから、他のものと一しょに使用したり、何人かで一しょに使用することから活動が活発になり、同時に何人かが参加する余地や参加の必要が生れ、同時的な関係を作る。

(ものの特性に規定された活動)。

(ぞうを積木の上に乗せて走らせて汽車ごっこをする。ぞうを投げっこする。とび箱に積木の板をわたして一方に積木、一方にぞうを乗せてバランスをとってみる。三人でぞうに乗ったりひっくりかえったりしているうちに、ぞうのまねをする。などの活動がみられる。)

4 ものの使用の仕方に即して参加者の地位の固定化の傾向が現われる。(幼児間の特性によって関係が作られる)

5 役割や、支配、被支配の関係が作られ、幼児間の関係は固定化し、ものは安定したしかたで使用される。(ものの特性と幼児の側の特性の両者に規定された活動)

(Aぞうをもっていたが、それに乗ってはしりまわりながら〇〇ちゃんいらっしやい” Bが加わり二人で乗るが二人では走れないので一人が買物かごをもってまたかり〇〇ちゃんお金しまいましょう” 何でもいいから積んで、ご本でもマリでもいいから” などという。A Bは二人でぞうに乗ったり、歩きまわったりする。AはB Cに”〇〇はこっち、あなたはこっち”と場所をきめてすわらせおままごを始める。他の子どもがぞうにさわろうとすると”ダメダメ”と禁止し、本やホールと交換でぞうに乗せる。などの活動がみられる。)

6 ものが人に従属したような形で、そのものが活動を誘発する

ことはなく、他の活動の手段とされる。したがってそのものが媒介となつて集団関係を作ったり、規定したりすることがなくなる。

(ぞうに乗ってボールをいじる。ぞうにまたがったままバズルに参加する。ぞうをだいたままピアノを弾く、などの活動)

これらの段階にみられるように、幼児の遊びの中で、遊具が果す役割には時期的な差異が認められることから、自由遊びの場での指導はそれぞれの段階における活動を充実させることでなければならぬと考えられる。

早くから成熟した集団遊びを期待するのではなく、一つ一つの段階を最も豊富な充実した形で経て次の段階への発展が可能になろう。したがってその指導の方法はその時期によって変えられなければならない、特に第三の段階で、活動の展開を主導的に行なう幼児の数が多ければ多いほど次の段階で複雑な関係が結ばれる可能性が多きことが予想され、その時期の指導の重要性が強調される。

〈まとめ〉

集団活動が展開される場面の一つの型として、縫いぐるみの動物に伴う活動をとらえてみたが、ここでは現象をとらえる範囲にとどまり、全体の経過に対する一つ一つの行動の意味を分析することはできなかった。指導の方法はその分析をまけてより明らかにされるであらう。

この観察場面では指導の試みをせずに自然の推移に任せただが、比較的短期間で遊具への興味が失われたのはそのせいで、このように単純な遊具一つによる遊びの場合は、多様な使用が現われたときに遊びが継続するような用具を用意したり、役割の分化をはかる必要が認められた。

またそのものが生活の中で道具化したときにそれに何か意味づけを行なう必要なものとして使用していくことが大切であろう。遊具の役割、機能を変化させて多面的な使用ができるように導くことによって充実した活動がなされるものと思われる。



倉橋賞を受賞して

幼児教育の問題に取り組んで自分なりに考えなければならなくなってから二年目になり、昨年一年間におつかつた種々の問題の中の一つを問題提起の気持で発表致しました。まだまだ発表以前の段階でありましたが、この受賞によって、更に続けて勉強していくことの意味が確認されたようでありへんうれしく思いました。

幼児教育への要望が高まっている現在、幼児教育に当る人の養成に関しても取沙汰はされておりますが、将来幼児の教育に当らうとしている人たちに専門的な知識や技術として体系的にどういうことを指導すべきかの問題になると、ともすれば実践と結びつきにくい発達心理学からの借りものであったり、事情の異なる現場ではあまり役立つまい研究にもとづくことが多いように思われます。すなわち基本的に幼児教育がね

らっている目標といかにしてそれを達成するかの方法との間にギャップを感じ、どんな状況下にあっても耐えるような、実践に役立つ幼児指導の方法の必要性を痛感しました。この研究は自由遊びの時間の幼児の一つひとつの活動の仕方とその効果との記録の分析によるものですが、このようなブリミティブな研究から先に出した現場での幼児指導の手がかりが得られるのではないかとという探索的な気持で始めたものです。

今後には幼児の活動の場を構成しているさまざまな要因を考慮に加え、遊具の種類による差異を明らかにすることや、自然発生源と閉鎖的な集団での活動のちがいがいなど、たくさん問題が残されています。しかもここではまだ対象幼児の特性ごとのような指導を受けてきたかということに規定された現象をとり扱っていることによる問題も解決されていません。たくさん問題が含まれています。少しずつ積み重ねを作っても役にも立つ結果を作りたいと考えております。

(郡山女子短期大学)